



信頼と満足への創造



高校生の頃から人の役に立つ仕事に憧れ、周りからの勧めもあり看護の道を希望しました。看護学校に入学後、看護実習を経験していく中で、残されている最後の時間を自分らしく過ごすことを目的とした緩和ケアに興味を持ち、消化器内科への所属を希望しました。入院の受け入れや検査搬送、検査介助など様々な業務のなかで患者さんの苦痛や不安などに寄り添えるように一人一人への看護を大切にしています。病状の悪化に伴い、苦痛が強い患者さんには患者さんとその家族の意見を尊重しながら苦痛の緩和を目的として緩和ケアを行っています。残された時間をその人らしく過ごせるよう、患者さんの身体的な苦痛に対してだけでなく精神的苦痛に対しても看護を行えるよう心がけています。患者さんだけでなく、家族ともコミュニケーションを取り両者が満足のいく時間を過ごせるように、病棟看護師とよりよい看護を検討し日々励んでいます。

内科病棟

皆様どうお過ごしでしょうか？新型コロナの変異株が次々と出てきている中、釧路、根室地方ではコロナ新規感染が抑えられています。コロナワクチンを接種し安心している方もいらっしゃるでしょうが、今後も感染対策へのご協力をお願いいたします。現在、ニュースで取り上げられているように、私達を取り巻く環境は日に日に変化していますが、人生80年時代から100年時代へと移り変わっています。超高齢社会がすでに到来し、看護師は現在もこれからも不足している状態です。少しでもこの新聞で看護師の魅力が伝わり、これからの未来を担う皆さんに興味を持っていただけたら幸いです。第1号では、少しでも私達看護師の仕事を知っていただきたく、看護学校を卒業して2~3年目の看護師に「~だから、私は、看護師を選ぶ」をテーマに新聞を作成しました。今回のテーマは、普段あまりのぞけない部署の「特殊な魅力のある看護」です。最後まで読んでください。そして、私達と一緒に働きませんか？数年後、お会いできる日を楽しみにしています。



私が働いているICUは内科・外科問わず集中的な治療と看護を行う部署で、洋上救急の受け入れから様々な国籍の人たちも入院して来ます。一般的にICUに入院する患者さんは重症患者が多く、人工呼吸器につながり話せない人が多いというイメージかもしれませんが、話せる人も多いのです。自分の言いたいことが通じない、知ってる人もいない、そんな環境に置かれることは誰もが不安です。そんな時、異国の地で言葉の壁は高いものです。専門性の高い医療現場において医療者同士や患者さんとのコミュニケーションが大切で、それが言葉によって実施されているものだと実感します。私は英語が話せるようになったら世界が広がると思い英会話を始めました。言葉の壁とどう向き合うか考えたときに英語を習得し、趣味を看護に活かすことができた時、さらに仕事にやりがいを持つこともできました。何歳になっても自分自身の成長を感じられる瞬間が私には大切だと思います。



NEVER GIVE UP!! ICU



私が助産師を目指すきっかけになったのは出産を見学したことでした。看護師になるための実習で、お産の見学を受け入れてくれたお母さんは、陣痛の合間に痛いながらも素敵な笑顔を見せてくれました。次第に強くなる陣痛と緊迫した空間、額に汗をにじませ、顔は真っ赤で苦しそうな表情を見せながら、とても長い時間頑張っている様子に出産の大変さを感じました。赤ちゃんが生まれた瞬間は今までの苦労が吹き飛ばすような笑顔がその部屋中に広がり、「おめでとう」という言葉と、赤ちゃんの元気な鳴き声が素敵な思い出として残っています。無事に産を終えた達成感と、その子をお母さんの胸に抱いたときの喜びを共感し助産師になりたい！と思いました。産科病棟は11月から個室の運用と、12月から無痛分娩を始めました。無痛分娩とは麻酔を用いてお産の時の痛みを和らげながら行う出産です。ある患者さんが「医学が進み昔と比べて手術の痛みはできるだけ痛くないように薬を使うのに、どうしてお産の痛みは取ってくれないんだろう」と言っていたのが印象に残っています。現代は多様性の時代でいつ産むか、どう産むかも以前と比べ選びやすく、選択肢は多いほうが良いのではないかと感じています。最後に妊娠や出産は大切なライフイベントであり、ほかの診療科とは違った出産への喜びや育児への不安・様々な悩みもたくさんあります。そして、多くの女性が一生に1人か2人しか子供を産まない時代になり、お母さんにとっても出産は数少ない貴重な体験です。大切なわが子の誕生の思い出を素晴らしいものにするため、産科病棟でスタッフ一同心よりお待ちしております。

産婦人科



法学部の大学に通っていましたが、一念発起し看護の道へ進みました。これ以上親不幸をしないよう、看護助手や薬局助手で働きながらの貧乏学生時代を過ごしました。実際に働くことができたときは感慨深いものがありました。現在は年間4000件もの手術に対応する手術室に勤務しています。手術は1件1件が患者様にとって人生を左右するものです。手術の前の準備や手技の学習の時には、患者様がどのような心持ちで来られるのだろう、体調や生活がどのようになるだろうと想像しながら、丁寧に行うことを心がけています。入室の際には患者様が少しでも緊張が和らげるよう、安心できる対応を心がけています。手術後に訪問すると、手術室スタッフが傍にいて安心したといった言葉をいただくことがあり、そのたびにやりがいのある仕事だと実感しております。

手術室

私は救急外来に所属しており、またフライトナースとしてドクターヘリに搭乗し活動しています。フライトナースは、医師と共にヘリコプターで病院外へ出動し、救急現場という病院内の救急初療室とは異なる特有な環境で、看護の実践や重症の患者様のヘリコプター搬送を行っています。治療・処置の補助のほか、患者様の状態を把握してただちに必要な処置を実施し、救命処置の継続や管理、患者様・ご家族の精神的ケアを行っています。治療処置が優先となりがちな救急現場ですが、突然の急病や事故による患者様やご家族の心身のストレスや不安は計り知れなく、看護師として心身のサポートを行い、患者様やご家族を支えていけるよう心がけています。その中で、救急現場で関わった患者様と病棟でお会いした時に、感謝の言葉を頂いたり、元気になっていく姿を見た時は、嬉しくやりがいを感じる瞬間であり、また救命の一助や患者様の支えになれたことは今後の励みにもなります。困難に直面することもあります。周りのスタッフに支えられたり、患者様から学ばせて頂いたり充実した毎日を送っています。今後も、救命のバトンをつなぐ一員として、患者様やご家族の支えとなれるよう看護を実践していきたいです。

救急外来

